

地域防災の必要性を再認識

6月14日、防災対策特別委員会を開催し、午前中は外入郷地区の視察を行った。急な要請にもかかわらず、地元区長、宮司、住民の方々にご出席をいただき、貴重な説明を受けた。安政南海地震（推定マグネチュード8.4）は、1854年12月24日に発生した海溝型大地震である。この地震発生後、津波の到達点が残っている場所を現地視察した。

その地点は、町並みをほぼ見下ろす海拔16mの地点であり、近くの大川を津波が遡上し、山野に流入したといわれている。地元では、こういった被害を風化することなく、津波到達碑及び案内看板の設置

を予定している。完成後には、当地区から次世代へ伝承する警鐘の碑にし、是非とも足を運び、大災害の教訓にして頂きたいとのことであった。

午後からは、町内の防災対策の動向視察を目的に家房地区を訪れ、区長より当地区の自主防災組織の結成及び避難訓練の状況成果等について説明を受けた。5月に周防大島チャンネルで放映された防災活動であるため、ご存じの方も多だろう。質疑応答される中にも、家房地区全体が適正規模の4地区の防災組織として同時に結成届がされている。担当職員も何度も足を運んだ



と聞く。結成に向けての問題点を聞くつもりであったが、逆に防災に対する前向きな姿勢と住民の一体感、地域力を感じざるを得なかった。さらには、年4回の祭り行事を含め、花見等で年6回は区全体の集まりがあると聞いた。

こうした平素の付き合いが、全てを物語っていると再認識した。4地区合同の避難訓練は、160名が参加。サイレンを合図に高台の神社に向かう。消防団は居

残りがいないか確認に回り、リヤカーに負傷者を乗せ移動。そして区長に点呼報告。看護学校からの生徒も参加し色を添えたそうだ。場所をかえ、防災センター長からの講話と充実した地域ぐるみの訓練が行われた報告があった。思いやりと連携の家房地区のように自分たちの命は自分たちで守る、その自助、共助の取り組みが必ず防災減災につながると痛感した。

近年の甚大な被害に備え地域の防災力が求められている。江戸時代からの地震の周期等についても、担当課より説明を受け、地震活動期にある現在を再認識し、あらためてその必要性を強く感じている。皆さんの地区も集まってみてはいかがですか。

